
IS インフィニット・ストラトス 蒼い流星

古川刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 蒼い流星

【Nコード】

N0683Y

【作者名】

古川刹那

【あらすじ】

本来は女性にしか扱うことができない兵器インフィニット・ストラトス通称IS。しかし、何故かISを起動させることができた織斑一夏そのことがきっかけで彼は女性しかいないIS学園に行くことになった。だが、そのことがニュースで世界中に伝えられたことによってある研究所に住んでいた少年たちもIS学園に通うことになり新たな出会いと生活が始まった。

プロローグ

某国にある秘密の研究所

「あとは炒めるだけで完成か。」

その時僕は、夕飯の準備をしていた。別に僕は、一人暮らししているわけではない、ただ一緒に暮らしている姉さんと親友たちよりも料理が好きなだけだ。ちょうど炒め初めたころ通信が入った。

「まーくん食事の準備できた〜」

「姉さんごめん、今炒めている最中だからもう少し時間がかかるよ。」

「そう、それじゃそれまでもう少し研究してるからできたら連絡してね。」

「うんわかった。じゃ連絡するよ。」

そこで僕はあることにきずいた。

「そういえば、やけに静かだけどあいつらは今何してるの？」

「今準備しているよ。」

「準備ってまた違う国に研究所移すの？」

「違うよ。二人にはIS学園に行ってもらうからだよ、まーくんも一緒に。」

「へーそうなんだ。ってIS学園は女子高だよ、しかも何で僕も一緒にいくことになってるんだよ。」

「そう、怒らないでよ理由はニュースを見てみなよ」

そう言われたからテレビの電源を入れてニュースを見て見ると久しぶりにみる顔が映っていた。

主人公紹介

名前：星川 将司

性格：自由奔放

趣味：読書

好きな食べ物：カレー

場所：静かなところ

こと：風を感じることに

言葉：はやきこと風の如く

身長：170cm前後

設定：常に自由奔放に動くが面倒見がよい。髪と瞳の色は黒。一夏と冪とは幼なじみ。6年前に両親と買い物に行くとき事故が起こり、彼だけが奇跡的に無傷で助かったが両親が事故死したことが原因で心を閉ざし、束が保護責任者になり少しずつ元気になっていたが束が失踪した時に彼も同時に失踪していた。事故のあとよく直感が当たるようになり、的中率が80%をほこる。制服は、行事の時は普通の制服を来て通常は上着の袖が無くフードが付いている改造制服を着ている。長袖の服はあまり着ず、寒い時の長袖の上着を着用する。

搭乗IS：流星

第？世代

GNコアドライブシステム

基本的にはガンダムOOと同じですが通信を妨害することができず、コアによって放出する粒子の色が異なり、シールドエネルギーは従来のISと同じだが武器や推進力はGNドライブからエネルギーが使用される。しかし、従来のISと異なりファーストシフトが完了するまでかなりの時間が必要となる。

機体と武装はガンダム〇〇のガンダムエクシアとだいたい同じでヘッドギアは、白式と同じでGNドライブから放出される粒子の色は青色をしている。武装は、GNビームサーベルは両肩に一本ずつとGNダガーは腰部に二本あり、それ以外の武器はコールする必要があるがGNソードとGNシールドは、展開時に自動的に装備される。
武装：GNソード

GNショートブレイド

GN ロングブレイド

GNビームサーベル

GNビームダガー

GNバルカン

GNダガー

GNシールド

主人公紹介（後書き）

キャラの紹介は、まだ主人公の設定しかちゃんと決めてませんが他のオリキャラの設定を早く決めて早く紹介文を投稿したいと思っています。

第1話 再会

Side:一夏

視線がきつい。

何で最前列の真ん中なんだ嫌でも注目されるじゃないか、それに久しぶりに再会した幼なじみの篠ノ之箒しののほうきに救いの視線を送ったら窓の外に顔そらされるは俺って嫌われているのか？そういえばあいつと別れてから箒と同じで6年は連絡がとれてないけどちゃんとしているのかな？

「くん。織斑一夏くん っ」

「は、はい!？」

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってるかな？」

「すいません俺が考え事をしてたのが悪いんですから先生は気にしないでください。」

「そ、そうですか、そしたら自己紹介してもらってかまいませんか？」

そのあと俺は自己紹介をしたけど、ちゃんと自己紹介しろと今まで職業不明だった姉の織斑千冬に頭を叩かれた、女子たちの大きな声を聞くことになり、いろいろ疲れた自己紹介になったなと思いつながらクラス中を見渡すと空席があることにきずいた。

「千冬姉後ろの「織斑先生と呼べ」・・・

はい、わかりました。」

頭がすごく痛い、間違っただけで頭を叩くなんて体罰なんじゃないか？てか次からは気をつけてかまいと。

「織斑先生後ろの空席があるんですけど、入学初日から誰か休んでいるんですか？」

俺がちょうど反省をしているころクラスの誰かが千冬姉に質問し

ていた。

「そのことは、後で説明するつもりだったがまあいいだろう。後の4つの空席が今、入試を受けている連中の席だ。」

「千・・・織斑先生何で入学初日から試験を受けるなんて何かあったのですか？」

「理由は、昨日急に連絡がきたのともうじきニュースで世界中に情報が伝えられるがそろそろ来るころだろう。」

千冬姉がそう言ったあと廊下から誰かが走ってくる音が聞こえてきて、ドアの前で立ち止まったようだ。

「来たようか、入ってこい。」

「あ、はい。わかりました。」

今ここじゃ聞くことがないと思っていた男の声が聞こえて一瞬嬉しさのあまり大声を出しかけたがここはなんとか声を出すことはなかったけど、どこかで聞いた覚えがあるような声だった。

「失礼します。今日から皆さんと一緒に学園生活を送ることになりました星川将司ほしかわまさしと言います。どうかよろしくお願いします。」

6年間、消息不明だった親友がそこにいた。

第1話 再会（後書き）

刹那です、第1話を投稿しました。

初めて書いたので原作キャラの性格が違ったり、誤字脱字がある可能性がありますができる限りないように頑張っていきたいと思っています。

次は他のオリキャラの紹介文を投稿する予定です。

第2話 初登校（前書き）

前回は次は紹介してないオリキャラの紹介する予定でしたがキャラの紹介は1人ずつ後書きで紹介して行くことになりました。ほんとすいません。

第2話 初登校

今、僕たち二人は走っている。

とある事情で今日からIS学園に行くことになり、今教室に向かつて急いでいた。

本来は走って行く必要も今日登校する必要はなかったの。ただ入試の日程が僕たちはとある事情で他の人たちとは違って、昨日と今日が試験日程だったが僕たちはそろって筆記試験があまりにも簡単すぎて1日予定のテストを休憩無しの4時間ぐらいで終わらし午後から僕たちは時間が余ったため急遽、実技試験を受けることになりテストが1日で終わった。そして次の日つまり今日は休みだと思いうつくりホテルで寝ていたのだが、「今日から学園に來い」となぜか今日の朝から電話がきた。つか何で昨日に電話してくれないんだよ。遅刻確定じゃないかと思いつつ走り続けている。

「おい、将司どうした早くしないと自己紹介の時間に間に合わないぞ。」

と、隣で並走している親友の神童 しんどう 一哉が話しかけてきた。

「一哉おまえちょっと待てよ。後ろの二人まだ追いついてきてないけど。」

「昨日徹夜してまで二人そろってゲームして遊んでいたやつが悪い。」

「ま、そうだけれど校舎を見えてきたし少しぐらいペースを落とし・・・」

てもいいんじゃないか？といいかけたが買ったばかりの携帯にメールが届いた。

「メールはあいつらからか？」

「僕たちが乗った電車の次の次の電車に乗って行くから遅れるって伝えといてって」

「・・・さてペース上げるか？」

「・・・そうしようか。」

そして僕たちはさっきよりも走るペースを上げって行った。

―数分後―

「やっと教室に着いたか。」

「久しぶりにけっこう走ったな将司。」

ドアの前で息を整えた後、ドアをノックした。

「来たようか、入ってこい。」

「先に入っているぞ。昔の親友に会うのを楽しみにしていたのだろっ。」

「サンキュー恩にきる。」

「あ、はい。わかりました。」

「先に入っているぞ。昔の親友に会うのを楽しみにしていたのだろっ。」

「サンキュー恩にきる。」

そしてドアに手をかけて開けドアを開けた。

「失礼します。初めまして今日から皆さんと一緒に学園生活を送るほしかわまさしことになりました星川将司と言います。どうかよろしく願います。」

「ます。」

さて自己紹介も終わったし、久しぶりに会う一夏たちに挨拶をしようと考えていたら...

「・・・きゃゝ二人目の男の子...」

人って集まるところまで大きい声が出せるとは考えてなかったな...

「お、おまえ本当にま、将司なのか？今まで何で連絡してくれなかったんだよ。」

あ、一夏だそんな前にいるとは思わなかったな。

「なに言ってるんだよ。僕は正真正銘おまえの親友でありおまえと

箒の幼なじみの星川将司だよ。まあ、詳しいことはまた後で話すよ。それよりもまずは……」

そう言っ僕はドアのところから窓側の列の一番後ろの空席に向かった。

「初めまして俺の名前は、神童一哉だ。できたら下の名前で呼んでほしい。ついでに言つと今ここにいない後の二人は男で遅れてくるから俺や将司に質問をしたりするのは二人にが到着してからにしてほしい。これからよろしく頼む。」

そう言っ一哉は僕の隣に来たが、それまでに僕の時以上の歓声が響いてうるさかった。

第2話 初登校（後書き）

ーキャラ紹介ー

神童一哉 しんどうかずや

性格：冷静

趣味：ギター演奏

髪の色：黒

身長：約170cm

好きなもの：ギター

場所：涼しいところ

言葉：しずかなること林の如く

設定：常に冷静に物事に対処する。あまり感情を出すことも少ないが苛めなどの暴力ごとに関しては、すぐに怒り相手を説教する。将司とは、将司が世界中を旅している時に偶然会い意気投合しともに旅をした。空間認識力が高く後ろからの攻撃などにすぐに対処することが可能である。

2話を投稿できました。ちゅうと半端な終わりですが、そこは勘弁してください。

次回の投稿は6日中を予定しています。内容はまだ出てきてない二人を出すことが確定しております。

第3話 遅れた二人（前書き）

今回は未登場の二人がでてきます。

第3話 遅れた二人

一哉の自己紹介が終わり、他のクラスメイトの人たちの自己紹介が一通り終わり休み時間が始まり、廊下に他のクラスの人たちが僕たち目当てだろう人たちで埋め尽くされていてほんと迷惑だろうと考えていたら、一夏が箒に連れ出されてどこかにいつていた。

「将司、あの一夏ってやつどうして連れていかれたんだろうな？」

「あゝそれは、僕も含めて一夏と箒は幼なじみなんだ。たぶん久しぶり会ったから何か話したいんじゃない。」

「それだとしてどうしておまえに声をかけないんだ、それとあの名字あの人妹か？」

その質問の答えを周りに聞かれないので一哉に近づいて小声で話した。

「・・・あまり周りには、言わないでよ。一哉おまえの気付いたとおり、箒はあの人妹だよ。一夏だけを呼んだのは一夏のことが好きだからだよ。」

「そうか、わかった。人の恋路を邪魔するわけにはいかないじやたな。そういえばあの二人から・・・」

一哉がしゃべろうとしたときにちょうどチャイムがなった。

「確か次から授業だったな。さて準備するか。」

「そうだね、けどよく考えたらあの二人が徹夜で遊ぶことなんかするはずないと思うんだけど。」

「確かにそうだな、じゃあ何でだろうな？」

「たぶん聞いたらわかるだろうし、もうすぐ来る気がするよ。」

「そうか、おまえの直感は信じてもいいからな。」

話しが終わった後、千冬さんと山田先生が来て授業が始まった。

ー10分後ー

廊下から足音が聞こえてきたらどうやらこの教室の前で止まったようだからあの二人が着たようだ。

「遅れてすみません。今日から皆さんと一緒に学園生活を過ごすことになりました、ヴァン・ハレヴィです。よろしくお願いします。」

ー

「初日から遅れてすまない。俺の名前は暁剣あかつきさねです。今日はヴァンと俺は学園から登校は、明日からでいいと初め言われていたので俺達の専用機のフルメンテで夜遅くまで作業していたので今日からここに登校することになったとき準備ができてなかったため今日は遅刻してしまいました。明日からは今日みたいに遅刻しないようにします。ので皆さんこれからよろしくお願いいたします。」

「おい、剣けんの馬鹿、俺たちが専用機をもっていることはまだ秘密にする必要があったのに何でしゃべるんだよ。」

「あ、ごめん忘れてた。」

説明するの面倒だな

「ハーイ質問です。何で一哉君たちは、専用機をもっているんですか？」

やっぱり聞いて来るか。どう答えたらいいか・・・

「すまない。そのことは、他言無用になっていて誰にも言うてはいけないんだすまない。」

一哉ナイスフォローこれでなんとかなつたはず

「おまえたち静かにしろ。今は授業中だ続きは休み時間にしろ、ハレヴィ、暁とりあえず空いている席に着けこれから授業を再開する。」

それから授業が再開され、一夏が馬鹿やって怒られるは、休み時間になると質問攻めにあうわで1日目の学校が終わった。

第3話 遅れた二人（後書き）

ヴァン・ハレヴィ

身長：約167cm

性格：明るい

趣味：写真撮影

髪、瞳の色：金髪、碧眼

好きなこと：誰かと話すこと

もの：写真

設定：争い事を好まなず何かあったら話し合いで解決することをモットーにしている。過去とある理由で1人になることを嫌い、よく誰かと一緒にいることが多い。よく写真を撮影してどこに誰と一緒にいたかを忘れないようにしている。射撃能力においては四人の中では誰にも負けない。

暁 剣

身長：約169cm

性格：勇猛邁進

趣味：鍛練

好きなこと：修行

もの：修行道具

設定：とある理由で常に体を鍛えているが自分にちょうどいいぐあいに筋力があるように鍛えている。隠し事が苦手で秘密にすることもあつさりと黙っていることも忘れてしゃべってしまうことがある。

刹那です。更新は基本週一で更新します。

四人の出番の割合が違いかも知れませんが出来る限りの同じにしていこうとがんばっています。

第4話 クラス代表？（前書き）

遅くなりましたが投稿します。

第4話 クラス代表？

今僕たちは、一つの部屋「哉と剣の」に集まっていった。

「は、登校初日から疲れる1日だったね。」

来てそうそうヴァンがそう言った。

「まあ、にぎやかでいいんじゃない。けど今日の三時間目のあれはちょっと困ることになったけどさ。」

「たしかに将司の言うとおり面倒なことになったな。だがクラスの代表に立候補させられることになるのはここにいる俺たち誰1人も予想できなかったしな。」

なぜこんなことになったからと言うと

「二時間目の休憩時間」

「一哉、ちょっと行ってくるわ。」

「そうか。俺たちはあとから挨拶しに行くから先に行ってこい。」

そうして僕は一夏の席に向かった。

「や、久しぶりだね一夏。六年間元気にしてたかい？」

「久しぶりだな、将司。こっちは特に変わらなかったけど今まで

連絡せずに何してたんだよ？」

「まあ、外国を転々としてたけど特に何もなかったな。」

本当はいろいろあったけど言わなくていいこともあるからな。

「あ、そうだ。そういえば一夏「ちょっとよろしくて？」」

話そうとしたところ金髪ロールの女の子が話しかけてきた。

「たしか、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットさんでよかったけ。僕たちに何かようかな？」

「そうですわ。あなたの言うとおりわたくしはイギリスの代表候補生ですわ。」

一夏が何か困った顔をして小声で

「なあ、将司。代表候補生って何？」

その瞬間、僕はあまりにも簡単なことを聞かれてずっとこけてしまった。

「セシリアさんに聞いてみるといい。」

とりあえずそう言うと、実際に聞いたので聞き耳を立てていたクラスの女の子数名がずっとこけた。

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃてますの！？」

「セシリアさん落ち着いて。一夏も何かいつてよ。」

「そう言われたて全然知らん。」

その言葉でセシリアさんが冷静になったのか、頭が痛そうにこめかみを人差し指で押さえながらぶつぶつ言い出した。

「信じられない。信じられせんわ。極東の島国というのは、こつまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら」

「セシリアさんちょっと言い過ぎだよ。それと一夏、代表候補生はその国のISの操縦者の代表候補のことでエリートのことだよ。」

「そうですわ。そう！エリートなのですわ！」

今までの発言からセシリアさんは女尊男卑の考えを持っているようだな。まあ、ISの登場でその考えを持っている人が多いから普通か。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とはクラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか、それはラッキーだ」

一夏それは、聞きようによつては挑発だよ。

「……馬鹿にしていますの？」

「特に、大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですね」

「俺に何かを期待されても困るんだがなあ、将司？」

「ごめん一夏、僕と一哉たちはISの研究してたし僕たちの機体はだいたいの部分と武装を自分たちでつくったから。それと僕たちといつても一夏以外なんだけれども一応、みんな代表候補生だから。」

「ふうん、あなたたちも代表候補生ですの。ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたたちのような人間にも優しくしてあげますわよ」

「一夏はともかく僕たちは結構です。」

「ISのことわからないことがあれば、まあ泣いて頼まれたら教えて差し上げててもよくつてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート 中のエリートですから」

「ISを動かして戦うやつなら、俺も倒したぞ・・・将司たちはどうなんだ？」

「訓練機使って四人とも勝ったよ。」

「は……？ わ、わたくしだけと聞きました が？」

哑然とするセシリアに一夏は追い討ちを掛ける

「女子ではってオチじゃないのか？」

「僕たちは、昨日だったから知らなくてもおかしくまいよ。」

「あ、あ、あ、あなたたち、わたくしをぶ……」

セシリアの言葉を遮りチャイムが鳴った

「くっ……、話はまた後で。逃げないことね！ よくって！
？」

そう言いながらセシリアさんは自分の席に戻っていった。

「まだ立っている奴、とつとと席につけ」

どうやら三時間目は千冬さんが授業をするらしく、 山田先生はノートを手になっている。

「ああ、授業の前に再来週行われるクラス対抗戦 に出る代表者を決めないとな」

意味が分からないらしく一夏は首を傾げていた ところを千冬が全員に聞こえるように言う

「クラス代表者とはそのままの意味だ。ちなみに クラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推 移を測るものだ。今の時点でたい

した差はないが、競争は向上心を産む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりでいろ、まあ、俗に言えば 学級委員みたいなものだ」

教室が少し騒がしくなった、すると一人の生徒が手をあげて

「はいっ、それなら私は織斑君を推薦しますっ！」

「あたしもそれが良いと思いますーす」

「じゃあ、私は星川君に」

「じゃあ、私は一哉君を」

「私はヴァン君を」

「それなら私は剣くん（つね）を推薦します。」

「候補者は織斑 に星川、神童、暁、ハレヴィ……他 にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

ここまできたら辞退はもう無理か

「お、俺っ!？」

一夏は反応するが無意味な行動である

「織斑、席に着け、邪魔だ。他にはいないか？ いないのなら二人で決めるが」

「俺はやるって言ってな——」

「座れ、馬鹿者。先程自薦他薦は問わないと言っ ただろうが」

と言われ一夏は、納得してなさそうな顔しながら席に着いた。

「他にはいないのか？ いないならこの5人でISの戦闘によって決定したいと思う」

と千冬が閉めようとした時にセシリアが立ち上がり

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

パンツと机を叩いてさも不服そうに言葉を紡いだ。

「そのような選出は認められません！ 大体、男 がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？

」

と言い反対すると同時に男子を侮辱し始める

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東 の猿にされては困ります！ わたくしはこのよう な島国までIS技術を修練しに来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

侮辱もエスカレートしていき

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそ

れはわたくしですわ！」

？

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては――」

プツンッ！ 切れた

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ世界　一まずい料理で何年覇者だよ」

「少しぐらいISの操縦時間が長いからって偉そうにしないでくださいよ。」

一夏も切れていた様で僕と一緒にのタイミング　で言う。

「あ、貴方がた、わたくしとわたくしの祖国を侮辱するのですか
！！」

「侮辱？何を言ってるのですか、僕は事実を述べ　ただけです。」

「決闘ですわ！」

二人を指差し、セシリアが宣言する

「ああ、いいぜ、やってやるよ」

「こちらこそ受けて立つ。」

そう言った後、ヴァンが椅子から立ち上がって

「オルコットさんその決闘僕とペアを組んで闘ってくれないか？イギリスは僕の祖国であり、同じイギリス代表候補生として君が侮辱されたのも許せないからね。」

「本国から何も連絡がなかったのですが本当ですか？」

「その事については、時間があるときに僕自信で伝えるつもりだったからな。で、どうする？」

「それならいいですね。」

ちよつと面倒なことになったな、さてどうするか考えていたら剣が

「織斑先生それだったら、ペアを組んで総当たり戦をして、成績の良かったペアのどちらかがクラス代表になるのはどうですか。」

「まあ、いいだろう。異論があるものはいるか？」

「「「「はい、異論はありません。」「「「「」

「ならいい。ペアは織斑、星川ペア、オルコット、ハレヴィペア、神童、暁ペアなお試合は一週間後とする。」

こうしてクラス代表決定戦がはじまった。

第4話 クラス代表？（後書き）

刹那です。

やっとクラス代表戦に入れそうになりました。

ペアを組んでの総当たり戦にしたのは、人数が多いのでそうしました。

次の話は、クラス代表戦前の準備期間を書こうと考えています。

第5話 提案（前書き）

前回は長くて今回は短くてすみません。

第5話 提案

「さて一つ提案があるんだけどいいかな？」

ヴァンがそう言って

「提案の内容はなんだ？」

「試合のとき単一仕様能力の使用についてなんだけど。」

ワンオフ・アビリティ

「そういうことか。試合するのは僕たちだけじゃなく一夏やセシリアさんもさんかするからね。」

僕はたぶん理由だと思ったことを言ってみた

「将司の言うとおりだよ。」

「たしかにあの能力は、強力だ。だがあれに初見で対抗するのは難しいし、織斑やオルコットがいるからフェアじゃなくなるからな。」

一哉の言うとおりあれは強すぎる。

「じゃあ、どうするんだ。あれ無しで戦えって言つのか？」

剣^{ツルギ}がヴァンにそう言ってヴァンが剣に

「それもいいと思うんだけど、あれのデータを取る必要もあるからあれは各試合どっちのチームも一回だけにしようと思うんだけどそ

れでいいかな？」

「それならいいな。」

「僕もいいよ。」

「俺もそれならいい。」

「さてそろそろ時間だから解散しようか。」

その一言できょうは解散となった。

―廊下―

「ヴァンすまない。今日は少し言い過ぎた。」

「将司は良いよ、一夏君に対して怒ったけど将司に対して一夏だけ言ったら問題になるかもしれないからと言いたいんだけど、本当は、少し君に対して怒ったからね。」

「そうか、けど試合のときは容赦なしで正々堂々やろうか。」

「うん、いいよ。最後にひとついいかな？」

「ヴァンどうしたの？」

「試合のとき、蜂の巣にするからバイバイ。」

ヴァンが最後に怖いことを言って帰った。

「・・・さて、とりあえず自分の部屋に向かうか。」

そう言って自分の部屋に向かって帰った。

―将司の部屋―

部屋に入ると二人部屋だった。一人で住むには少し広いなと思いいながら

「さて今日はいろいろあったけど賑やかな1日だったな。明日は夏のこと考える必要もあるし、もう寝るか。」

新しい生活の1日目が終わった。

第5話 提案（後書き）

刹那です。

今回出てきた能力は、試合のときに出すので予想ができると思いますが、
すが楽しみにしててください。

今回は一夏との試合に向けての話にするつもりです。

第6話 試合準備

―自室―

「あーよく寝た。さて準備して朝食食べに行くか。」

食堂に向かってため部屋のドアを開けるとちょうど隣の住人も出てきた。

「うん、将司ではないか。お前の部屋は隣だったのか。」

どうやら隣は箒の部屋のようだ。

「将司、少し外で話さないか？」

―寮屋上―

「おはよう箒。昨日は話してなかったけれど6年間元気だった？」

「いや、あの人のせいで転々と過ごしていてな一夏とおまえに昨日久しぶりに会えたばかりだ。」

そう言った箒の顔は少し悲しそうな顔をしていた。

IS学園

「まあ、ここに来て一夏に会えたからいいんじゃない。僕は一夏がISを動かしてここに来ることになったから一哉たちと来ることになったんだけどまた三人で会えたんだからそれでいいんじゃない。」

「そうか、あの人は元気か？」

「あゝ姉さんなら元気だよ。これからはわからないけど。箒、幼なじみとして頼みたいことがあるんだけどいいかな？」

「なんだ将司、頼みとはなんだ？」

「一夏に剣の稽古をつけてほしいんだ。」

「それはいいがどうして私なのだ。お前もいるだろう。」

「それはね僕は六年間、剣道やってないんだ。だからといって剣の道を捨てた訳じゃないんだけど僕の剣術はほとんど我流だから人に教える訳にはいかないんだ。それに一夏から聞いたんだけど箒は、剣道は全国クラスの腕を持つてるから頼みたいんだよ。」

そして小声で

「それに箒だって一夏と二人きりなりたいでしょ。」

すると箒は

「そ、そ、それは……」

顔を赤くしていた。

「大丈夫だって誰にも言っていないから心配しないで。それに僕は馬に蹴られたくないし、二人こと応援してるからね。」

「ありがとう、将司。実を言つとな一夏とは同じ部屋なんだ。」

へーそうなんだ、同じ部屋なんだ。ま、まさか

「ごめん、まさか再会した初日から一緒に寝てたなんて・・・」

「そ、そ、そんなことはしていない勘違いするな!」

「けど、一夏まだ起きてないから夜遅くまで起きて男女・・・」

「そ、そ、そんなことはしていない!一夏が起きてこないのは、まだ早朝だからだ。」

「そう、ごめん。いろんな国に行ったりしてたから生活時間がめちゃくちゃになってたんだ。」

「それなら仕方ないか、ちなみに食堂が開くまでまだ時間があるから、私は剣道の鍛練があるが将司はどうするんだ。」

「そうだな時間があるし、僕も付き合ってもいいかな?」

「いいが、せつかく二人でやるんだお前の成長を見てみたいし手合わせをしてみないか?」

「いいよ。じゃあ準備ができたらどこに行けばいい?」

「いや、部屋が隣だから一緒に行こう。」

そうして僕は箒と一緒に鍛練することになった。

―1時間後―

「将司、だいぶ剣の腕を上げたな。」

「まあ、強くなりたかったからなんだけれども。」

「昔から剣道だけは熱心に打ち込んでいたが今はそれ以上だな。」

「あのとき何もできずに守られることしかできなかったから同じ思いをまた味わうのがいやだったからね。」

今は、もう無力じゃないからね。

「あれは、お前は幼かったからしかたないじゃないか。」

「まあ、あの出来事があったからこそ変わることができたんだ。それにあのときの僕には戻りたくないんだ。まあ、暗い話は、このぐらいにしておこうよ。とりあえず一夏を起こしに行こうよ。」

そのあと一夏を起こしに行つて、一緒に朝食をとつて学園に向かった。

―放課後 剣道場―

「どういうことだ。」

「いやどういふことつて言われても・・・。」

時間はかなりたつて放課後。剣道場にいるのは一夏の実力を見るた

めに箒と手合わせをしてあっさり負けた一夏に箒が怒っていた。

「どうしてここまで弱くなっている!？」

「受験勉強してたから、かな？」

数ヶ月とは思えないくらい弱くなってるないか？ とりあえずあつてはいけないことを聞くべきだとおもった

「・・・一夏、中学のとき何か部活してた？」

「帰宅部。3年連続「一夏、少しは体を鍛えようよ。」・・・すまん。」

最悪なことになったけどどうするか。そう考えていたら箒が

「ーなおす」

「はい？」

「鍛え直す! IS以前の問題だ!これから毎日、放課後3時間、私が稽古を付けてやる!」

「え。それはちょっと長いようなーていうかISのことを」

「一夏、ISのことを知ることでも大事だがいISを動かすのは人だ。武器の使い方を知らなければ勝負にもならないから頑張ってね。」

そう言っ僕は剣道場を後にした。

翌日対戦日程が発表された。ペア代表が望んだため対戦時は、試合をしないペアは控え室待機、対戦相手の情報は得意の距離のみ公開、機体詳細は口外禁止というルールが決まった

1 試合目

織斑、星川ペア vs オルコット、ハレヴィペア

2 試合目

オルコット、ハレヴィペア vs 神童、暁ペア

3 試合目

神童、暁ペア vs 星川、織斑ペア

第6話 試合準備（後書き）

刹那です。

試合なんですがこのルールにしたのは試合を見て対策を考えられないするためだけです。

次回はから試合が始まります。

まだ全試合は考えてませんができる限り早く投稿するつもりです。

第7話 VSヴァン、セシリア（前書き）

テストのため更新ができなかったのですみません。

第7話 VSヴァン、セシリア

―第三アリーナ・Bピット―

「なあ、箒、将司」

「なんだ、一夏」

「なにかあった、一夏」

一夏が急に話し掛けてきた。

「気のせいかもしれないんだが」

「そうか。気のせいだろう」

「ISのことはどうなってんだ？」

そう言った瞬間僕と箒は目をそらした。

「二人して目をそらすな！！」

一夏は試合当日まで一度もISの訓練せず、ずっと箒と二人きりで剣の稽古をしていた。

「まあ、とりあえず落ち着こう一夏」

「将司、そういえば昨日まで剣の稽古に来ないで何かしていたのか」

「あー昨日までISの整備と武装の点検をしたりハツキ、調べことをしてた」

「今、ハッキングって言いそうになってないか」

まあ、少しデータを調べたぐらいだけど

「二人とも息ぴったりだね。まあ、今のは最後のは冗談だよ」

とりあえず嘘をついた。

「それはおいといて、ISを使って稽古しなかったのは、訓練機の貸し出し許可をとるのが面倒だったのと、専用機と訓練機だと結構違うからね」

「まあ、そういうことだ一夏」

「わかったけど、将司は一度も剣を握ったとこ見てないけど今日が試合の日なのに大丈夫なのか」

「それは大丈夫だ。将司とは毎朝剣の稽古をしていたからな」

「そういうことだ。せつかく試合のことになったんだし作戦でも決めようか」

「ちょっと待てよ俺の」

一夏がしゃべっていると山田先生がこっちに走ってきて

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！来ました！織斑くんの専用I

S！」

それから一夏は、白式を手に入れたが時間が無いため初期設定のまま出ることになった

「一夏さっきは言えなかったけど相手のオルコットさん、ヴァンは銃を使う。だからまず距離を詰める必要がある」

「ああ、わかった」

「ヴァンとは何回か模擬戦をしてるから僕がやるよ」

「じゃあ、俺はセシリアの相手をするけど連携をとらなくて大丈夫か」

一夏が大事なことを言ってきたが

「いや、僕はともかく一夏の白式はまだ設定の途中だから二人に狙われると反応できない可能性があるからだめだ。それと少し調べたけどオルコットさんのISは何機あるかわからないけど遠隔操作のビットを装備してるから気をつけて」

織斑、星川時間だそろそろ準備しろ

すると千冬さんから通信があり

「将司先に行ってるぜ」

一夏が先アリーナにいった

「さあ、行くよ流星。僕達の初めての表舞台だよ。全力でいくよ」

僕もアリーナに向かった

「お二人ともよく逃げずに来ましたね」

来た瞬間ブルー・ティアーズを展開したオルコットさんが話し掛けてきた。

「ああ、逃げたくないからな」

一夏が言い返して

「僕もそうだけど、実力が君とかなりあるとは思ってないからね」

「凄い自信ですわね」

「セシリア、将司関しては僕と実力はほぼ互角だから油断できないよ」

「ヴァン久し振りの戦闘だね」

緑色のI S翡翠に乗ったヴァンに向かって僕はいった

「そうだね。僕達はいつもチームで戦うことの方が多かったからね」

「手加減無しの全力勝負といきますか」

「ああ、行くよ」

その瞬間、試合開始のブザーがなった直後に僕はスラスタ全開でヴァンに突っ込み、ヴァンが展開していたGNスナイパーライフルで狙ってきた

「くそ、やっぱり接近さしてくれないかけど

」

スナイパーライフルの攻撃を回避しながらGNソードをライフルモードにしてこちらもヴァンに向かって射った

「無駄だよ。射撃の腕は僕の方が上だよ」

「そんなことわかってるよ」

そう言った直後左手で腰部にマウントしてあるGNビームダガーを投げた

「危ないな」

そう言ってヴァンはダガーを避け、スナイパーライフルからGNビームピストンに変えて連射してきたが構わずシールドを前に出して

ダメージ覚悟で突っ込んでいた。

「まだまだ、そう簡単には僕はやられないよ」

「こっちもそう思っているよ」

そう言うヴァンはビームピストンを左右に展開して弾幕をさらに張ってこっちのシールドエネルギーを奪って行く

「く、ヴァン忘れてないかい射撃の性能は確かに君の方が上だよ。けどISの機動力は僕の方が上だよ！」

イグニッションブースト

その瞬間僕は瞬時加速を使って距離を詰め展開していたGNソードをで切り裂き左手に展開したGNロングブレイドで追撃した

「く、さすがに今のは結構効いたね。けど僕だけに集中していいのかな」

そう言われて一夏の方を見て見るとオルコットさんの射撃とビットを相手に苦戦していた。

「ヴァン確かに一夏が苦戦しているけどそっちもいいのかい」

「いいって何が」

「こっちは言うことさ」

その瞬間僕はソードをライフルモードにしてヴァンの方に向けオルコットさんの方に最後のビームダガーを投げたがヴァン方は避けられたけどオルコットさんの方は反応するのが遅すぎたためダメージを

くらいその隙に一夏がビットを三機破壊しつつオルコットさんに接近していた

「将司、どうしてセシリアが反応できないと思ったの」

「それは基本、ビットを使うときはビット操作に集中する必要があるからだよ。もっとも僕はあいつが使うあれは自動で動くからすっかり忘れてたけどね」

そう言い終わるとヴァンが急に笑いだして

「残念だけどこうなるのは、予測通りだよ」

一夏の方を見るとオルコットさんが目の前の一夏にミサイルを直撃させていた。

「しまった！一夏！？」

「将司隙だらけだよ」

ヴァンがビームピストンで防御するまもなく攻撃してきた。

「くそ、間に合ったか」

「間に合うって防御が間に合っていないよ」

一夏の方を見ると煙の中から一夏がファーストシフト一次移行を終えた白式を展開した一夏がいた。

「バカな今まで初期設定で戦っていたのか！？」

ヴァンがあまりのことに驚いていたがどうやらオルコットさんも同じように驚いていた。

「今だ、トランザム」

そう言った瞬間、流星の全身が青くなり放出される粒子の量が一気に増加した。

「しまった、トラン」させるか」ぐわ」

ヴァンの発動を阻止するため瞬時加速を使ってソードで力いっぱい切り裂きダメージを与える

「これでとどめだ!!」

とどめにソードで切り裂き、左手で肩に固定しているGNビームサーベルで切り裂きシールドエネルギーを0にした。

「くそ、ここまでか」

ちょうどその頃一夏がオルコットさんを倒していた。

勝者織斑、星川ペア

なんとか勝利をできとりあえずビットに戻る千冬さんと箒がいて

「星川（将司）、あの青い粒子について聞かせてもらおうか」「

二人同時に同じ事を聞かれてきた。

「どうしたんだよ、千ふ、いて「織斑先生だ」織斑先生に簿」

一夏が不思議そうに二人に聞いて

「分かりました。織斑先生このことは後で四人でレポートに書いて提出という形でよろしいですか」

「今は試合中だから、まあいいだろう」

「簿には一夏と一緒に今から説明するよと言いたいけど、さっきヴァンからオルコットさんにも説明するらしいからそのときにいいかな」

「わかった」

「なあ、将司のESは何か違うのか」

一人まったくわかってない人がいたけど

「この話は今はおしまいとりあえず今は休む事が優先だよ」

そう言って僕は控え室に向かって歩き出した。

第7話 VSヴァン、セシリア（後書き）

作者「どうも古川刹那です。テスト勉強のため更新ができなかったのすいませんでした」

将司「どうも一応主人公の星川将司です。」

作者「今回から後書きにキャラを出そうと思いやってみました」

将司「今回はヴァンのI.Sの設定も公開します」

機体名：翡翠

第？世代

GNコアドライブシステム

機体設定

GNコアのほうについては流星とほぼ同じで放出される粒子の色は緑。機体と武装はガンダムデユナミスだいたい同じでヘッドギアはイヤホンマイク

武装

GNスナイパーライフル

GNビームピストン

GNミサイル

GNビームサーベル

将司「というふうになっていますが、ヴァンは接近戦が得意ではないのであまり使いません。あとミサイルの位置は肩になっています。」

作者「補足説明も終わったので次回はヴァンが来て一夏たちにGNコアの説明をする予定です。」

将司「では次回もどうかよろしくお願いいたします」

第8話 (前書き)

タイトルが思いつかなかった

第8話

「控え室」

「そういえば一夏、セシリアさんを倒したとき剣が青くなってたけど何かあったの」

一夏に試合の映像を見て疑問に思ったことを聞いてみた

「ああ、零落白夜って表示されてから剣が変化したんだ」

「そのことについては、私が千冬さんから聞いてある」

「どんな能力なの」

「バリアー無効化能力だそうだ。」

「バ、バリアー無効化能力だって!？」

な、何て強力な能力だ。

「そんなに強い能力なのか」

何も知らない一夏が聞いてきて

「ああそうだ。簡単に言えば自分のシールドエネルギーを消費して相手に大ダメージを与える能力だ」

内容を知っている筈が答える

「ふーん、そうなのかじゃあ将司のはどんな能力何だ」

「まあ、一夏の能力の方が強いけどね。それも後でおし」「失礼するよ（しますわ）」「試合が終わるにはさすがに早すぎるよ、ヴァン、オルコットさん」

話そうとしたら試合中のはずのヴァン達が入ってきた

「あーちよつとした理由で今日の試合はおわったんだ。織斑先生には一哉達が説明しにいったよ」

「そうなんだ。じゃあ説明する約束だったからするけどここじゃなんだから後で僕の部屋は一人しかいないから後できてよ」

そう言つてとりあえず解散した。

ー将司の部屋ー

コンコン

「入っていいよ」

そう言つとドアから一夏と箒が入ってきた。

「よ、将司来たぞ」

「失礼するぞ」

「あ、待ってたよ一夏、箒」

そう言って僕はパソコンをスリープさした。

「将司何か調べてたのか」

「いや、今回はIS関係のプログラムを作っていたところ」

「将司お前プログラム作れたのか!？」

あれ、言っでなかったけ。

「おい、一夏前に将司達は自分で専用機を作ったと確か言っていたはずだぞ」

あ、ちゃんと言っていたか。

「一夏達だっているいろいろあったんだし僕もあのままのはずはないからね(コンコン) 入ってきてよ」

ちょうど話終わった頃にまたドアがノックされ入ってきたのは、ヴァン達だった。

「失礼するよ(しますわ)」

「いらっしやい、さて全員揃ったことだし僕達のISの説明をしようか あれは僕とヴァンが一哉に会った頃だから3年ぐらい前だったかな」

「待てよ将司、昔話を聞きに来たんじゃないんだけど」

「いや一夏くん、結構関係あるよ。今は静かにしていてよ」

ヴァンが答えて、続けて

「ちょうどある山の近くを通ったとき、僕達三人だけ何かに引き寄せられる感覚がしたんだ」

「山中を調べるときに僕達世界中を旅していた剣（つるぎ）に出会ったんだ。聞いて見ると似たような感じがしたらしい」

僕が言い終わりヴァンが

「よく調べると洞窟を見つけたんだ。そして洞窟の奥の方に行くと不思議な岩7つ有ったんだ。四人とも違う岩に引き寄せられる感覚が有ったんだ。調べて見るとその岩が隕石だったことがわかったんだ」

「そのあと、7つの岩を全部削っていくと綺麗な水晶が入っていたんだ。そして僕とヴァン、一哉興味を持った博士でよく調べるとその水晶は研究所のあるものに反応したんだ」

「そのあるものは みんなのよく知っているISのコアだったんだ」

「もっと詳しく調べるとエネルギーを発生することが分かって、そのエネルギーで武装と機動力分を水晶から使用しているんだけどここから先は機密事項だから話せないけど何か聞きたいことはある」

そこまで言ってみんなを見て見ると驚いた顔をしていてオルコットさんが

「あのヴァンさん達の単一仕様能力の詳細を教えてくださいませんか」

「トランザムのことか。あれは機体に蓄積した高濃度圧縮粒子を全面開放し、一定時間スペックの3倍に相当する性能を得られるって能力なんだ」

僕の説明が終わると一夏が

「けどそれだと零落白夜より強いと思うけどさっきトランザムの方が弱いって言ったけどどうして何だ」

「それはちょっとデメリットが高いんだ。トランザムは使用後機体の性能がかなり低下してビーム関係の武器の威力を低下するんだ。そして疲労が激しいんだ」

ヴァンが説明をした。

「将司が使用したのに全然疲れているようには見えないがどうして何だ」

篤が聞いてきて

「それならヴァンさんもわたくしと模擬戦したときもですわ」

オルコットさんも聞いてきた。

「一応疲れているけど動けないほどじゃないんだ、それとヴァンはオルコットさんという模擬戦したの」

ヴァンに聞いてみると

「ペアを組んだ日の次の日にね」

「まあ、将司達も結構デメリットが高いんだな」

「まあね。とりあえずオルコットさん前に言ったことは謝るよ」

「いえ、わたくしも態度が悪かったのでおあいこですは。それとわたくしのことはセシリアと呼んでください皆さん」

「じゃあ、僕達も名字じゃなく名前で呼んでよ。一夏達もいいよね」

一夏と箒も頷いた。

「じゃあ、僕もヴァンって呼んでね。とりあえず、そろそろ夕食の時間だから僕達はもう行くよ、行こうセシリア」

「あ、はい。皆さんまた後で会いましょう、行きましょうヴァンさん」

そう言ってヴァンと腕を組んで歩いて行った。

「なあ、将司、箒あの二人仲がいいな」

一夏が二人の関係がわかってない発言をした。

「（どう見ても付き合ってるだろう）」

「とりあえず、僕達も行くよ」

「ああ、そうだな」

そして僕達も夕食を食べに言ってそれから僕はプログラムの作成があるから食後に別れて1日が終わった。

第8話 （後書き）

投稿が遅れてすみません。

テスト後やる気が起こらず今まで時間がかかってしまいました。
今日中にもう一話投稿します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0683y/>

IS インフィニット・ストラトス 蒼い流星

2011年12月25日12時56分発行